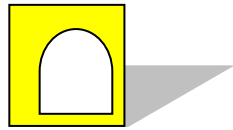


日吉台地下壕保存の会会報



第162号
日吉台地下壕保存の会

モノから人へ —記憶の継承—

会長 阿久澤 武史

今年は戦後80年と昭和100年にあたり、さまざまなメディアで特集記事や番組が組まれています。日吉台地下壕が取り上げられる機会も増えています。

日吉台地下壕保存の会は1989年4月に発足しました。元号が昭和から平成に変わったのがその年の1月8日でしたから、会の歴史は平成から令和の36年間と重なります。元号が変わっても、私たちは一貫して昭和の時代の戦争を見つめ続けています。

5月3日(土)の『朝日新聞』朝刊に、今年2月下旬から4月上旬にかけての全国世論調査の結果が掲載されていました。夏の参院選を前に有権者の政治意識を調べたものです。その中には、アジア・太平洋戦争(朝日新聞は「1945年に終わった戦争」と表現)について学校でしっかり教わったかどうかや、戦争体験の継承に関する現状調査も含まれています。その結果を見ると、戦争の記憶を次世代につなげていくことがますます難しくなっていることがよくわかります。「自ら当時の体験がある人」と「自らの体験はないが体験者の話を聞いたことがある人」の割合は10年前の調査より減り、「どちらもない人」は10年前の29%から38%に増え、40代より下の世代では40%台半ばから50%ほどと高くなっています。

慶應義塾史展示館では、昨年6月から8月にかけて『慶應義塾と戦争——モノから人へ——』と題した企画展が行われました。戦争体験者が少なくなり、戦争を語る主体が「人」から「モノ」に移ったと言われます。こうした中で「モノ」から「人」に何をつなげていけるのかを問う展示でした。朝日新聞が調査したのは「人から人へ」の継承ですが、そこに「モノから人へ」という視点を加えたとき、どのような数字が確認できるのでしょうか。

私は勤務校(慶應義塾高等学校)で、3年生の必修科目「卒業研究」を担当しています。生徒が関心のあるテーマで論文を書く、少人数のゼミ形式の授業です。私の講座名は「日吉から考えるアジア・太平洋戦争」、今年は13名が履修しています。その中に家族に残る戦争の記憶をテーマに選んだ生徒がいます。曾祖父が海軍の軍人としてミッドウェイ海戦に参加したため海軍の戦史について調べたいという生徒、曾祖父が海軍技術中佐だったため軍事施設について調べたいという生徒です。ほかに回天特別攻撃隊の隊員として戦死された塚本太郎さんを研究対象に選んだ生徒もいます。彼は塚本さんと同じ

【目次】

巻頭言【1-2p】 モノから人へ—記憶の継承— 会長 阿久澤武史

総会報告【2-5p】

第37回日吉台地下壕保存の会 講演会・定期総会

報告【6-7p】 第30回2025 平和のための戦争展 in よこはま

副会長 喜田美登里

☆感想 特別企画2

運営委員 上野美代子

☆被団協 和田さんの講演によせて

ガイド 高橋昭仁

報告【7-9p】 保存の会がTV出演しました 運営委員 佐藤由香

お知らせ【9-10p】

第28回戦争遺跡保存全国シンポジウム「信州まつもと大会」

連載【11-13p】 日吉海軍・設備アレコレ(42)

28工法によるバーンカット掘削 運営委員 山田 譲

お知らせ【13p】 パネル展示会・講演会(港北図書館、日吉の本だな)

連載【14-15p】 海外戦跡めぐり(29) フィリピン戦跡III

フィリピンの捕虜収容所 運営委員 小山信雄

報告【15p】 「日吉台地下壕の歴史」出前講座行いました

活動の記録【16p】 2025年4-7月

運営委員 小山信雄

体育会水球部員、同じゴールキーパーです。慶應義塾大学在学中に学徒出陣で海軍に入り、人間魚雷「回天」に搭乗し、21歳の若さで亡くなった塚本さんの後輩にあたります。部室に塚本さんを追悼したレリーフがあり、それを毎日目にする事で、自分とのつながりを感じているそうです。

家族の歴史は「人から人へ」の記憶の継承です。残された日記や手紙、自分史などがあれば、「モノから人へ」の継承となります。記念のレリーフという「モノ」を通して、若い世代の「人」につながることもあります。家族や先輩後輩といった関係の中で、いまここにいる自分自身との直接的なつながりを感じた瞬間、過去の記憶や記録は、現在に生きるものになっていきます。

前号の『会報』（第161号）で、慶應義塾湘南藤沢高等部の3年生の感想文が紹介されました。高校生が地下壕を歩き、柔らかい感性で戦争の現場を感じている様子がよくわかります。そこに次のような文章がありました。

派手で残酷な被害の裏には、下には、淡白で静かなトンネルが隠されていました。被害の報告を集め、攻撃の命令をし、作戦を考えていた戦争の核。世界で最も冷たい場所でした。このことに気づいてから地下壕を再度見てもやっぱり何もないままでした。灰色の壁と天井と床。こんなにも何もないのに、こんなにも多くの人の命について考えさせられる場所はありません。

戦争遺跡という「モノ」、そこを歩き、感じ、考える「人」（見学者）、その中間に立つ戦跡ガイド——、「モノから人へ」を媒介する存在として、ガイドする私たちの言葉の重さについてあらためて考えなければならないと思っています。

定期総会報告

第37回 日吉台地下壕保存の会 講演会・定期総会

日時：2025年6月28日（土）午後1時～4時

場所：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎大会議室

主催：日吉台地下壕保存の会

※以下の議案はすべて異議なく承認されました。

☆2024年度活動報告

◇会員数：個人251名 会報交換・寄贈団体：86団体

◇運営委員会開催：2024/4～2025/3 11回

◇会報発行：4回 158号（7/18）～161号（4/25）

◇地下壕見学会：2024/4～2025/3 41回 1,774人

◇ガイド養成講座：2024年4月13日（土）～7月13日（土）修了者15名

◇港北区読書講演会：2024年5月11日（土）日吉の歴史～キャンパスと共に歩んだまち 港北図書館・港北区役所地域振興課主催 講師：阿久澤武史 来往舎大会議室 50名

◇第29回平和のための戦争展inよこはま：2024年5月31日（金）～6月2日（日）神奈川県民センター 日吉台地下壕 展示参加

◇慶應義塾福澤研究センター設置講座「近代日本と慶應義塾」のゲスト講師としての授業 5月20日（月）亀岡敦子、5月27日（月）阿久澤武史、6月10日（月）

7月15日（月）見学会 日吉台地下壕保存の会

◇定期総会開催：第36回 2024年6月15日（土）来往舎シンポジウムスペース

◇講演会 総会開催前に開催 講演内容：戦争体験の継承 - 現状と課題を考える
講師 吉田 裕氏（一橋大学名誉教授、東京大空襲・戦災資料センター館長）

◇港北図書館パネル展示会・ミニレクチャー・講演会：

展示会 2024年7月17日（水）～8月17日（土）

ミニレクチャー 7月20日（土）、8月3日（土）、

講演会 8月10日（土）『日吉キャンパスにある戦争遺跡』

◇日吉台地下壕パネル展示会（日吉の本だな）

2024年8月18日（日）～9月3日（火）

◇取材対応：塾生新聞 7月27日（土） 毎日新聞キャンパル 8月3日（土）

FMヨコハマ 8月7日（水） 共同通信社 9月11日（水）

◇第27回戦争遺跡保存全国シンポジウム北九州やはた大会に参加

2024年8月17日（土）～19日（月）（参加者 350名）

17日 全体会・講演会

18日 第1～3分科会発表

第1分科会 保存運動の現状と課題（日吉台地下壕保存の会）

◇瀬谷海軍弾薬庫跡の現状と課題

◇3Dモデルで日吉台地下壕を探ってみよう！

19日 現地見学会

☆軍艦防波堤・小倉陸軍造兵
廠・北九州市平和のまちミ
ュージアム、大連航路上屋
火ノ山砲台・陸上自衛隊小倉
駐屯地史料館、北九州市平和
のまちミュージアム等

◇日吉地区センター設置講座 2024

年9月21日（土）参加21名

◇ガイド学習会：2024／9～2025／3

4回 日吉地区センター

◇聞き取り：2024年11月7日（月）

日吉台地下壕経験者・河崎三千夫さん
鶴見公会堂会議室
参加8名

◇講演会 講師：阿久澤武史

2025年

1月24日（金）慶應倶楽部1月例会

3月1日（土）慶応義塾大学教職課
程センター研究交流・懇親会

◇下田町フィールドワーク：2025年

2月15日（土）眞福寺（下田地蔵
尊）、日吉の森庭園美術館参加13名

◇明治大学・平和教育登戸研究所資

料館見学：2025年3月29日（土）

参加18名 渡辺賢二氏（明治大
学講師）による展示解説等

2024年度 決算報告

（単位 円）

費 目	2024年度予算	2024年度決算	備 考
【収入の部】			
会費	400,000	360,796	161名
見学会資料代	600,000	953,800	
図書等頒布	100,000	10,700	
寄付金等	0	30,152	
ガイド養成講座受講料	40,000	34,000	
資料集		102,850	205冊
繰越金	482,448	482,448	
計	1,622,448	1,974,746	
【支出の部】			
運営費	150,000	98,626	各種会合・打ち合せ等
事務費	100,000	69,417	事務用品費等
印刷費	250,000	422,068	会報・資料等
通信費	250,000	249,004	会報送料等
図書資料費	50,000	0	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	90,500	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	50,000	69,320	講演・学習・調査等
冊子作成費	300,000	0	
予備費	372,448	0	
小計		998,935	
差引残高		975,811	次年度繰越金
計	1,622,448	1,974,746	

以上の通り報告します。

2025年6月13日

日吉台地下壕保存の会

会 計 亀岡 敦子



この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子

会計監査 山口 園子



☆2025年度 予算 (単位 円)

費 目	2025 年度予算	備 考
【収入の部】		
会費	400,000	会費 2,000 円
見学会参加費	1,000,000	
図書等頒布	10,000	
ガイド養成講座受講料	60,000	
資料集	100,000	
繰越金	975,811	
合計	2,545,811	
【支出の部】		
運営費	150,000	各種会合・打ち合わせ・保険料等
事務費	100,000	事務用品費等
印刷費	750,000	会報・冊子・資料等
通信費	250,000	会報送料等
図書資料費	50,000	参考書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金・ガイド交通費等
謝礼	100,000	講演・学習・調査等
予備費	1,045,811	
合計	2,545,811	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2025 年 6 月 28 日

日吉台地下壕保存の会
運営委員会

☆2025 年度日吉台地下壕保存の会
運営委員・会長・副会長・会計監査

会 長 阿久澤 武史

副会長 亀岡 敦子 喜田 美登里 羽田 功

運営委員 上野 美代子 遠藤 美幸 岡本 雅之
小野 由紀 岸本 正 小山 信雄
佐藤 宗達 佐藤 由香 田中 剛
福岡 誠 宮本 順子 山田 譲
山田 淑子

会計監査 熊谷 紀子 山口 園子

☆2025 年度 活動方針

今年は戦後 80 年ということもあり、日吉台地下壕に対する関心の高まりを感じています。新聞や地元メディアで地下壕や保存の会の活動が紹介されることも多くなり、見学会への参加問い合わせも増えています。昨年度より受付を電子メールと携帯電話に切り替えました。定例見学会の定員は 40 名から 50 名に増え、大学や小中高を中心に研究教育目的の見学会をガイドする機会も増えています。

ガイド養成講座は、昨年今年と多くの受講者を迎えました。新しいガイドをお迎えできることは、会として大変喜ばしいことだと感じています。見学会の実施回数や参加人数が増え、ガイドの人数も増えている中で、ガイドのあり方に対する検証の必要性も感じるようになりました。見学会を安全に運営することを何よりも優先し、そのために必要な役割を明確にする必要があります。戦跡ガイドとしての心構えや適切な言動などについても明確にし、共有しておきたいと考えています。

今年度、特に課題にしたいのは、これまでの聞き取りを記録化する作業です。地下壕関係者の証言や戦争体験者からの聞き取りの記録は、音声記録のみならずメモ類まで含めると相当の分量になっています。そうした貴重な記録を散逸させずに後世に残すための方法を、まずは検討していきます。

年 4 回の会報の発行、ガイド養成講座、ガイド学習会、講演会、出張授業の実施など、今年度も昨年同様の活動を継続します。会の運営費は、一口 2000 円の年会費のご協力をいただくようになった結果、以前に比べ安定するようになりました。今年度も引き続きご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

地下壕の文化財指定に関しては、引き続き慶應義塾や横浜市への働きかけを行っていきます。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会・展示を開催し、運営する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。



講演される杵島正洋先生

講演会

総会に先立って、杵島正洋氏（慶應義塾高等学校教諭 理科・地学、慶應義塾大学講師 地学・日吉学）より、約 2 時間、「日吉の丘から学ぶ地球のこと、人間のこと」のテーマで講演していただきました。総会終了後には、日吉キャンパスフィールドワークにて、蝮谷、谷底道路沿いの露頭、崖下の稲荷、弥生住居址群などの現場解説をしていただきました。

報告

第30回 2025 平和のための戦争展 in よこはま
横浜大空襲から 80 年

副会長 喜田美登里

5月29日の横浜大空襲の日に合わせて開催してきた「平和のための戦争展 in よこはま」は今年で30回目を迎え、5月25日・5月30日～6月1日まで、かながわ県民センター（横浜駅西口）で開催しました。この「戦争展」に日吉台地下壕保存の会は第1回目から参加しています。5月25日、31日は特別企画として2階ホールにて以下の講演等を行いました。



かながわ県民センター1F展示場

5月25日（日）（特別企画1 空襲・被爆）

挨拶と講演：「被爆80年 ノーベル平和賞受賞・オスロからニューヨークへ、そして、これから」和田征子（日本被団協事務局次長・横浜市原爆被害者の会会長、平和のための戦争展 in よこはま実行委員長）

朗読：絵本「ひろしまのピカ」岡崎弥保（俳優）

体験を語る：「忘れられない記憶・横浜大空襲」藤原律子（瀬谷区在住）

報告：「横浜大空襲の現場に向き合う～戦争犠牲者を数字で終わらせないために」
NGO グローカリー

5月31日（土）（特別企画2 戦争のない世界を）

講演：「戦後80年、核も戦争もない世界を」小沼通二（慶應義塾大学名誉教授）

朗読劇：「マブニのアンマー・沖縄の母～沖縄を再び戦場にしない～」横浜市立日吉台中学校演劇部

報告：「祖父のインドシナからの書簡」今村 睦（磯子区在住）

5月30日～6月1日まで、1階の展示場では横浜州市史資料室所蔵の横浜大空襲の被災状況を伝える写真等をメインに約500点を展示しました。会場を「のむぎ」の平和のバラが飾ります。内容・参加団体は「横浜大空襲から80年/空襲体験画/教科書/横浜の戦跡/教科書/日吉台地下壕/野島掩体壕/船と戦争/アジアでの戦争/被爆80年/高校生が描いた広島・原爆の絵/日本被団協のあゆみ/占領下の横浜/横浜・沖縄の米軍基地/サイゴン解放50年/憲法/平和のバラ/WFP」

特別企画のホールには、両日とも200名、展示場来場者を含めて、開催中約1000人の参加がありました。新聞掲載は7紙、TVK放映など、マスコミ報道は例年よりも多数あり、『戦後80年』への関心の高さだったのではないかと思います。「横浜大空襲」の記録など、横浜市の戦争の記録を常設展示できる「施設」の必要性を毎年痛感します。会場で書いていただき、展示場に掲示した「感想アンケート」は計122枚ありました。



朗読劇：横浜市立日吉台中学校演劇部

☆感想 平和のための戦争展 in よこはま特別企画2 運営委員 上野美代子

最初に日吉台中学校演劇部の朗読劇は、沖縄戦で亡くなった息子の遺骨を11年間探し続けた母親の話で胸に迫りました。最後に世界平和アピール7人委員会委員の小沼通二さんの講演。世界は争いを繰り返しているけれど終わらなかった戦争はない。けれども現在、第2次世界大戦後もっとも危険に満ちていて、人類絶滅の危険の警告を示す世界終末時計が2025年89秒になったとのこと。軍事増強ではなく、対話を重ねる外交が大切であるとも話されました。いま私たちはなにをなすべきか？考えていかなくてはとあらためて感じました。

☆「平和のための戦争展inよこはま2025」

被団協 和田さんの講演に寄せて

ガイド 高橋昭仁

昭和20年8月9日午前11時2分、長崎へ原爆は投下されました。和田さんの「私は被爆者です」とのお言葉に、衝撃とかという感じではなく、私自身の中に深い重みを感じました。そのように思ったのは、私は縁あって、令和7年5月より財閥系の会社に再就職をいたしました。主力工場は長崎にあります。一緒に働く方には、恐らく被爆2世3世4世の方もいらっしゃると思います。誰も、表立って原爆について語ることはありませんが、それぞれの心の中には、戦後80年の歴史は深く刻まれているものと思います。工場内には系列工場を繋ぐ直径10mものトンネルが掘られていました。ここを80年前は、機械を積んだトラックが系列工場の間を走っていたそうです。

強固に作られているので、現在は危険を伴う試験場として利用されています。社外秘となっており、詳細にはお伝えできませんが、ここにも民間企業が作った地下壕があります。

報告

保存の会がテレビ出演しました！

運営委員 佐藤由香

風薫る5月、tvk(=テレビ神奈川。神奈川県地方チャンネル)放送の「ハマナビ」に出演しました。「ハマナビ」は“横浜をマナビ、横浜市をナビゲートする”をコンセプトに、横浜市の魅力や取組を紹介する広報番組です。今年は戦後80年、横浜大空襲(5月29日)を控えた5月24日放送回は「平和について考える」がテーマで、番組は三部構成で紹介されました。

- ① 日吉台地下壕の保存と戦争を伝える活動に取り組む「日吉台地下壕保存の会」
- ② 横浜大空襲体験者：藤原律子さん
(喜田さんのご紹介)
- ③ 横浜市立みなと総合高校のフィールドワーク

以下経緯・感想など交えながらご報告致します。



3月24日：横浜市政策経営局広報課より取材依頼メールが届きました。

昨年夏、終戦の日に合わせてラジオ放送（FMヨコハマ “YOKOHAMA My Choice！”）に出演したご縁から今回はぜひ地下壕のテレビ撮影をさせてほしいとのオファーでした。先方には地下壕は一般公開されていない施設であることから、音声だけのラジオはともかく動画は難しいのではないかと。実際テレビ取材は2015年（戦後70年にマスコミ特別公開）以来許可されていないことを伝えた上で、取材窓口の慶應義塾広報室とお繋ぎしました。

3月25日：慶應義塾のご許可があり、なんと10年ぶりに地下壕の扉が開くことになりました！会長の阿久澤先生とも、画期的なことだねと喜び合いました。

4月16日：横浜市広報課、tvk制作ディレクターとの打合せ。地下壕見学の概要をパンフレット（見学会冊子）や、ガイドマニュアルの手引きを元にご説明しました。

5月初旬：進行台本のチェック2回

5月14日：ロケ日（第2水曜日の定例見学会）

13時に取材クルー6名とガイド（喜田さん、山田譲さん、佐藤）とで来往舎に集合しました。クルーが冒頭撮影のロケハン中、私達は音声さんからピンマイクを装着してもらいました。ガイダンス前に、tvkから見学者の皆さんに取材同行及び後方からの撮影ご許可をいただき撮影開始です。ガイダンス風景と第一校舎を撮影した後は、見学会本隊とは別行動になります。地下壕内はガイドがレポーターの方に説明しながら歩く姿をgo pro・スマホ含む3つのカメラで同時撮影しました。LEDライトが並んだ照明パネルが地下壕の隅々を明るく照らし出します。足を踏み入れた瞬間、ディレクターさんは地下壕の規模感に驚いていらっしゃいました。

1周目は通常通りにご案内。ディレクターさんは特に壕内での生活ぶりが気になるようで、2周目は設備にフォーカスして撮影（人物抜き物の撮り）は進みました。最後は来往舎に場所を移し、地下壕保存の意義や、会の活動についてお話しをしました。ちなみに練習や撮り直しはなし、全て一発勝負です。取材クルーからの注文やダメ出しもなかったのも、ガイド3人自然体で臨めたかなと思います。

5月20日：最終台本、ナレーション、字幕テロップのチェック。

最終稿をチェックすることで、放送前に大まかな番組構成を把握することができました。4時間ほどカメラを回した中で、どこが使われるのか、どう切り取られるのか気懸りだったので、チェックしながらディレクターさんと擦り合わせができたことは安心材料となりました。



5月24日：放送日。佐藤家はテレビ前で正座して視聴。限られた時間でよくまとめて下さったなと思いました。保存の会の今後の活動に少しでもプラスになったのであれば良いのですが…。tvkさんからは番組DVDを頂戴しました。ご興味ある方は佐藤までお申し出下さい。

また番組ホームページに
アーカイブがあります。
YouTubeにて視聴できます。

<https://www.tvk->

[yokohama.com/hamanavi/](https://www.tvk-yokohama.com/hamanavi/)

2025/5/24 放送：戦後 80 年

平和の尊さを未来へつなぐ

「過去の放送内容リスト」を
ご確認ください。



最後になりましたが、ご協力いただいた皆様ありがとうございました。

お知らせ

第 28 回戦争遺跡保存全国シンポジウム

「信州まつもと大会」2025.8/23（土）～25（月）

戦後 80 年を迎え戦争の事実をどう伝えるか

—戦争遺跡の保存・文化財指定・活用を考える—

◇主催：戦争遺跡保存全国ネットワーク 第 28 回戦争遺跡保存全国シンポジウム信州
まつもと大会実行委員会

◇趣旨：

戦後 80 年を迎え、二度と戦争を起こさない、平和のために正しく戦争の実像を伝えることはますます難しくなっています。また世界中では現実には戦争が起こっている場所もあります。このような中で、戦争遺跡を保存し、活用することで、次世代に平和の輪をつないでいくことが大切になっています。

第 28 回全国シンポジウムは 16 年前の第 13 回大会に次いで 2 回目の開催となります。松本は、先のアジア太平洋戦争時には、中国・東南アジアで戦争を繰り広げていた歩兵 50 連隊・150 連隊の駐屯地であり、また、三菱重工業の航空機生産の拠点工場が、疎開していたところでもあります。そういう意味で松本は軍都であり、戦争の傷跡を多く残している地です。空襲の被害もありましたが、長野県は中国人の強制連行数は全国で北海道について 2 番目に多く、朝鮮人の強制労働も多くの場所で行われており、加害の傷跡も各地に戦跡として残っています。長野県内を見ても、松代大本営や登戸研究所の疎開地など本土決戦に向けた戦争遺跡も多く残っています。

松本市は 16 年前の松本大会後 4 か所に戦争遺跡ということで説明板を設置するなどし、平和推進課・平和ユースネットなどの活動も戦争遺跡への自治体の取り組みとしては先駆的な部分があります。戦時下外国人労働者についての調査報告書も出版しています。しかし、松本はもちろん、長野県内での戦争遺跡の文化財指定は少なく信大内の赤レンガ建物、南安曇農業高校第 2 農場内日輪舎、松川町の防空監視哨、木島平村の監獄壕などわずかで今後の保存・文化財指定・活用について問題を残しています。

今回の第28回戦争遺跡保存全国シンポジウム 信州まつもと大会では、全国各地の保存運動の教訓・問題点に学び、それぞれの地元の戦争遺跡から、二度と戦争を起こさない、平和のための活動を盛り上げていきたいと考えています。

◇会場：松本第一高等学校

全体会（多目的ホール1F）

分科会（視聴覚室4F・教室3F・PC教室2F）

◇日程

8月23日（土）

13:00～開会行事 来賓挨拶・主催者挨拶

13:30～記念講演

「戦後」80年を生きる ―戦争に向かいあう心理と論理

大串潤児さん（国立歴史民族博物館教授、元信州大学教授）

15:00 休憩

15:15～基調報告（戦争遺跡保存運動の現状と課題）

16:00～地域報告（松本の戦争遺跡16年の変化・登戸研究所の疎開）

17:00～戦争遺跡保存全国ネットワーク会員総会、その後分科会打ち合わせ会

18:00～交流会（松本第一高校多目的ホール）

8月24日（日）

9:00～12:00 分科会（1. 保存運動の現状と課題、2. 調査の方法と保存整備の技術、3. 平和博物館と次世代への継承）

12:00～13:00 昼食

13:00～15:00 分科会（つづき）

15:00～15:30 休憩

15:30～ 全体会（集会アピール・特別決議・分科会報告）

8月25日（月）フィールドワーク（最少開催人数に満たない場合は中止します）

半日コース…松本市の戦争遺跡松本市北部戦跡（地下壕内の見学はしません）

4,000円（マイクロバス20～25人）

一日コース…登戸研究所疎开工場・駒ヶ根市登戸研究所平和資料館他

5,000円（貸切バス35～45人） 昼食は各自

◇書籍販売

23日午後から24日昼まで、戦争遺跡関係の書籍を販売します

◇戦争遺跡パネル展示

23日午後から24日まで、展示スペース（または廊下）で行います

◇費用

参加費 1日につき1,000円（大学生500円 高校生以下無料）

交流会費 4,000円

昼食代 800円（24日のみ。お茶付き）

◇参加申し込み

[グーグルフォーム](#)（👉パソコンの **Ctrl** 押しながら、**マウス左クリック**）からお申し込み下さい。難しい場合のみ、メールやFAXをご利用下さい。

連載**日吉海軍・設備アレコレ（42）Z8 工法によるバーンカット掘削
運営委員 山田 譲****◎謎のバーンカット工法**

日吉の海軍地下壕を築造した第3010設営隊の元隊長伊東三郎氏は、回想記（『海軍施設系技術官の記録』所収）で「バーンカット工法」を開発して掘削したと書いています。私はこの「バーンカット」とは何なのか、長い間わかりませんでした。しかし戦後に土木学会が出した本にこのことが書いてありました。英語だと burn cut です。日本語に訳すと爆破工法となります。

まず伊東三郎氏の回想記の記述を見てみます。第3節「Z8 工法」には次のように書かれています。「日吉地区地下施設築城施工法の内、特筆するものの一つに、Z8 工法があげられる。この穿孔工法は、……長孔穿孔型試錐機による特殊穿孔工法」で、その応用実施例の中に「(4)導坑掘削の際の心抜長孔爆破孔 (5)堅坑掘削の際の lead 坑および心抜長孔爆破孔」と書かれています。その上で「Z8 工法考案者山本氏は……本工法について投書を寄せてこられたので紹介する。『私の考案した Z8 工法は……戦後初の米国式機械化工事として日本に技術導入されたバーンカット工法そのものであった。……わが海軍施設技術は決してアメリカに劣っていなかった』」とあります。また Z8 工法は利根ボウリング社の協力で開発したとも書かれています。

この山本氏は日吉の最初の地下壕である第一校舎脇の待避壕を掘った第300設営隊の山本将雄隊長・技術大尉です。東大工学部土木科卒の土木工学専門家で、戦後は日大工学部教授でした。日吉では第3010設営隊とともに連合艦隊司令部地下壕を完成させた後、野島（横浜市金沢区）の大型掩体壕工事に向かいました。

◎バーンカットは長孔掘削のための爆破工法

では「長孔穿孔型試錐機」とは何でしょうか。これは現在、地下ボウリング調査で使われている穴あけ機械＝ボウリング機と同じような機械のようです。伊東三郎氏は直径10～15cm、長さ60mほどの長い穴（長孔）をあける（穿孔）ことができると書いています。「試錐機」と書かれているのは、土質調査のためのボウリング作業を目的としてつくられた錐（先端がドリルになっている）のような機械ということです。この穴あけは垂直方向にも水平方向にも使えます。

このバーンカット工法について『日本の土木技術 100年の発展のあゆみ』（社団法人・土木学会 昭和39年発行）に説明が書かれていました。とはいえ土木工学の専門書なので私にはよく理解できないことも書かれています。それで私が理解できる範囲で紹介します。

4章・基礎技術の進歩 3節・トンネル 2項・掘削 (3)爆破 に次のように書かれています。「爆発方式はウェッジカット、バーンカットに大別でき、……後者は主として長孔掘削に適しているといわれ、戦後まもなく行われた東海道線新泉越トンネルにおいて、ミリセコンド電気管を使用してのバーンカット工法が行われ」た。

そして「ウェッジカット削孔例」として、70本の発破孔が描かれた図がしめされています。「発破進行1.5m」と書かれているので、1回の爆破で1.5m掘り崩すということのようです。ウェッジカットの説明はないのですが、ウェッジは台形またはクサビ型です。ですから少しずつ掘り崩していくイメージのようです。これに対してバーンカットは長孔を一気に爆破して掘り崩す工法のようです。したがってダイナマイトを地下土石の先の方まで仕掛けて、その爆発力で地下壕を急速に掘削するということだとわかりました。

◎『基地設営戦の全貌』の記述と一致

この記述を念頭において『基地設営戦の全貌——太平洋戦争海軍築城の真相と反省——』（佐用泰司、森茂著 鹿島建設技術研究所出版部 昭和28年発行）を読むと、そこに書かれていることの意味がわかってきました。この筆者も設営隊の隊長クラスの土木工学専門家です。この本の第2章・海軍築城施設技術 第4節・築城隧道と地下工場 第3項・地下施設の特殊施工法——長穿孔爆破工法の考案——には「隧道掘削その他についても次のような特殊工法が考案された。」と書かれています。

すなわち「在来の試錐機を改良して小型簡易化した穿孔機を以て、手動または簡単な動力により長大な穿孔をなし、これに適切な火薬の威力を併用して各種地下施設を急速に施工する方法であって、粘土質地盤に於ける中小隧道や換気用その他小口径穿孔の施工には特に有利である。中軟岩の隧道掘削や切取工事においても、削岩機に近い施工速度を有するので、空気圧縮機の不足に対し困難を感じず、かつ使用穿孔機は他機に比し小型軽量で空輸容易であり、また使用動力も僅少である等の利点がある。」と書かれていて、これは明らかにZ8工法そのものです。（Z8工法については資料集No.2『日吉海軍・設備アレコレ』4、5、13 ページ参照）

そして「（一）土質地盤における爆破工法」と「（二）岩盤における爆破工法」が解説されています。前者の土質地盤というのは「粘土質または火山灰質地盤」のことで、後者の岩盤は「中軟岩以下」のことです。日吉台の地質は上から箱根火山の火山灰ローム層、多摩川扇状地の砂岩・泥岩の礫層、下層は砂泥岩の基盤岩です（6月28日の総会での杵島正洋先生の記念講演による）。したがって堅穴空気坑は土質地盤、地下壕全体はほぼ中軟岩の岩盤を掘削していますので、「長穿孔爆破工法」＝Z8工法が使える地質条件です。堅穴でも横穴でもこの工法は使えます。

◎Z8工法は水平方向の掘削にも使われた

さしあたり横方向（水平方向）の土質地盤の掘削の場合は、「小型隧道施工法（爆破洞窟工法）」として「中心孔一孔を反復爆破するもので、奥行き25乃至30米の場合」1mごとにダイナマイトをしかける。この爆破を3回くりかえす。これで直径1.5mの穴が造成されるそうです（図1）。あるいは「6本の穿孔を逐次爆破して周壁を締めるとともに、内部を緩め屑出しをなす……穿孔長は約20米を適当とし、この穿孔には1本につき約1時間から1時間半を要する。」と書かれています（図2）。

他方、「岩盤における爆破工法」では「削岩機代用として、一般人力より遥かに速い。穿孔機を掘進正面の後方5米に据え」11本の穿孔をあけ、爆破順序は「心抜補助孔をまず整爆した後、その他に点火する……使用火薬量は軟岩においては1立方メートル当り0.3乃至0.5キロで十分であって心抜孔のみ他の1.5倍とする。穿孔機は手動大型機または3乃至5馬力の穿孔機を使用する。」そして、こ

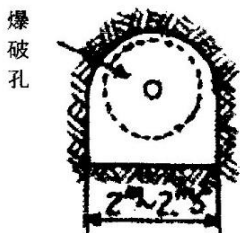


図1 爆破洞窟工法
(その1)

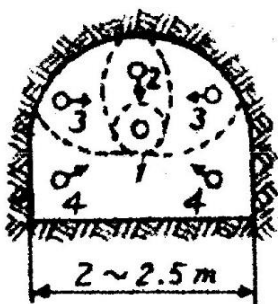


図2 爆破洞窟工法
(その2)

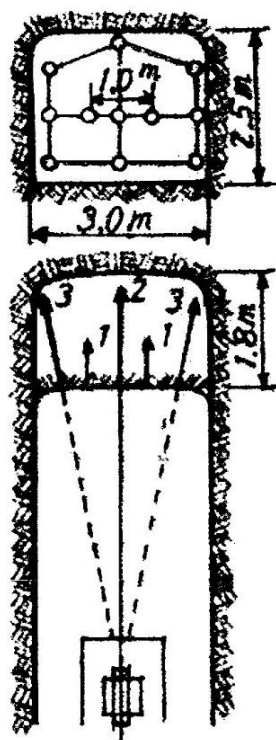


図3 穿孔機による
小型隧道掘進法

の文章に付けられている図には横幅 3.0m、高さ 2.5m、奥行き 1.8mを掘進するように描かれています。日吉の地下壕通路の断面サイズと同じ位です（図 3）。

さらに「中型及び大型隧道における切掘削法」として、「前記工法により隧道に導坑を造設した後、その切掘に際して……急速工法としては穿孔機により側方より導坑に平行に長穿孔をなし、全長展列装薬により一斉爆破を行うのが有利」「約 30 米の長孔を一挙に穿孔する」と書かれています。通信室や作戦室のような大きな部屋はこのやり方で掘削したのかもしれませんが。

また堅穴の口径を広げるためには「拡大錐を使用すれば軟岩においては孔径 15 cm、長 30 米までは容易に施工できる。」「孔径 20 乃至 25cm」も可能と書かれています。

私はこれまで Z8 工法という、地上から生コンクリートを地下に落とし込む穴などの堅穴をあける工法とばかり思っていました。しかし伊東三郎氏の記述には、はじめに引用した通り「導坑掘削の際の心抜長孔爆破孔」と書かれています。これは堅穴掘削とは区別して書かれています。ですからこれは堅穴でなく横方向の穴掘りのことだったわけです。そのことに私は今回はじめて気付かされたわけです。思っていた以上に Z8 工法は「特筆する」に値する工法だったのだとわかりました。なお第 3010 設営隊は地上に「火薬庫」を建てていたことがわかっています（資料集No.2「日吉海軍・設備アレコレ」17 ページ参照）。また日吉の住民が「工事の爆発音を聞いた」という聞き取りもあります。設営隊が爆薬を使用したことは間違いありません。

この工法の目的は、何かなんでも「急速に」、B29 の空襲と「本土決戦」にそなえなければならないということです。負けがわかっている戦争を、どうしてもやめようとせずに突っ走っていた異常な切迫感が伝わってくるようです。

〔図 1～3 は『基地設営戦の全貌』掲載図 1、2、3、4 の数字は爆破順序〕

お知らせ 主催：日吉台地下壕保存の会、横浜市港北図書館

◎パネル展示会（日吉台地下壕保存の会）

日吉台地下壕、戦前の日吉の様子、太平洋戦争関連の展示を行います

場所：横浜市港北図書館 1 階 “港北まちの情報コーナー”

展示期間：7 月 11 日（金）～8 月 16 日（土）正午まで

開館時間：9 時 30 分～17 時

※ミニレクチャー：展示会に来られた方々に保存の会の説明員が説明します

日時：7 月 19 日（土）、8 月 2 日（土）共に 14 時～16 時

◎講演会（日吉キャンパスにある戦争遺跡）

日時：8 月 9 日（土）10 時～12 時 **場所：**横浜市港北図書館 2 階 会議室 A

定員：当日先着 40 名（申し込み不要）

◎パネル展示会（日吉台地下壕保存の会）

日吉台地下壕、戦前の日吉の様子、太平洋戦争関連の展示を行います

場所：日吉の本だな（日吉図書取次所）

慶應義塾大学「協生館」1 階 日吉駅（東急東横線・目黒線、市営地下鉄グリーンライン）徒歩 1 分

展示期間：8 月 17 日（日）～9 月 5 日（金）正午まで

開所時間：月曜～金曜 10 時～20 時 土・日曜、祝休日 10 時～18 時

ミニレクチャー：8 月 20 日（水）10 時 30 分～11 時まで

連載

海外戦跡めぐり（29）フィリピン戦跡Ⅲ フィリピンの捕虜収容所
運営委員 小山信雄

間もなく 80 回目の「8 月 15 日」を迎えることになります。この日、日本はポツダム宣言を受け入れ、玉音放送が流れ、終戦の日となりました。しかしながら最前線の東南アジア等各地で、主に米軍と戦っていた全ての兵士たちに終戦が訪れた訳ではありません。フィリピン（以下比島）、ミンダナオ島の山中で従軍していた私の父達の部隊は、終戦後 2 ヶ月ほど「捕虜になることを潔しとせず」と抵抗を続けており、ついに 1945 年 10 月 10 日、投降することとなりました。

一度は父が収容所生活を送った場所を訪れてみたいと思い、昨年秋、比島戦跡ツアーに参加しました。あの戦争で日本人の犠牲者は 310 万人（内地で空襲、原爆、戦闘による民間人：50 万人、外地の民間邦人：30 万人、軍人・軍属：230 万人）と言われています。中でも比島の犠牲者は甚大で、動員兵力 63 万人の内 47 万人が亡くなり、生存者は 25% の 16 万人。私の父は幸いにもその一人となり、最終的にレイテ島タクロバンにある収容所で約 1 年間の捕虜生活を送ることとなりました。

◇レイテ島タクロバン捕虜収容所



タクロバン刑務所があったと思われるエリア（バスより）

タクロバンは 1944 年 10 月 20 日にマッカーサーが比島奪還の為に上陸した街であり、米軍は勝利後に大規模な捕虜収容所を建設。ツアーコースには含まれてなかったので、単独でも訪れたいと思い、現地の日本人ガイドの方とも相談しましたが、「既に収容所跡地は一般の住宅地に代わってしまっている」とのことと訪れることは叶わず。バスから「あの辺が跡地だった」との説明を受けながら思いにふけざるを得ませんでした。

以前、厚生労働省社会・援護局業務課調査資料室に父の軍歴について尋ねた結果、捕虜時代の詳しいデータを入手することが出来ま

した。Basic Personal Record (Alien Enemy or Prisoner of War) という米軍作成の 20 ページにも互る資料です（米軍から見て日本軍はエイリアン・外国の敵、もしくは戦争捕虜という位置付けでしたね）。父の身体の特徴、本籍地、軍歴、病歴、宗教など事細かに記されています。また、米軍からの支給品（衣類、ハブラシ、毛布、食器の配布個数、日時）、定期健康診断のデータ、収容所内で虫垂炎となり手術行った時の手術経過、投薬の種類、血圧・脈拍など詳細なデータも残されています。米軍のしっかりした管理体制には、ただただ驚かされます。直前まで空腹や熱帯病・マラリア等病魔と闘いながら猛暑のジャングルを彷徨っていた父達はどのように思ったのかと、想いを巡らせます。

原爆投下などアメリカは許しがたい非人道国家と思う一方、矛盾は感じつつも、敵国捕虜に対する対応、食料補給等の兵站（ロジスティクス）重視の体制には、合理的であり、人権に対する配慮を強く感じます。

◇ルソン島モンテンルパ捕虜収容所

ルソン島に渡り、モンテンルパ収容所を訪ねました。1952（昭和 27）年、渡辺はま子の「あゝモンテンルパの夜は更けて」で歌われた収容所です。こちらはマニラ近郊のモンテンルパ市にある「ニュー・ビリビッド刑務所」であり、現在も比島国内犯専

用の刑務所として使われています。旧宗主国スペインが設置し、その後アメリカが管理、1944年以降日本軍の管轄、戦後は日本人の捕虜収容所となりました。106名が収容、日本軍将兵79名が死刑宣告されましたが、戦後7年も経った1951年1月に、14名の処刑が執行されました。この事態に受刑者は言うに及ばず、日本でも衝撃をもって受け止められました。

死刑宣告を受けていたお二人（作詞：代田銀太郎、作曲：伊藤正康）による受刑者達の故郷を偲んだこの歌は当時の国民的人気歌手、渡辺はま子に直接届けられ、すぐにレコード化され、日本で20万枚を超えるヒット曲となりました。

当時国交の無かった比島への、渡辺はま子等による熱心な日本政府説得による1952年12月の収容所訪問実現、帰国後の助命嘆願運動、加々尾教誨師ら関係者の熱心な比島政府説得が功を奏し、1953年7月の比島独立記念日特赦により、全員の帰国が実現しました。恩赦を許可したキリノ大統領は、妻、三人の子供、五人の親族を日本軍に殺害されていますが、大統領の心を最終的に動かしたものとして、「あゝモンテンルパの夜は更けて」のオルゴールの音色だったと言われています。ニュー・ビリビッド刑務所の傍には日本人戦犯の慰霊墓地も設けられており、近郊にある山下奉文大将（民間人の私有地の中にある山下モニュメント）、本間雅治中将終焉の地（鬱蒼と木々が茂った奥地）も訪れました。



日本人戦犯の慰霊墓地

報告

「日吉台地下壕の歴史」出前講座行いました

運営委員 小山信雄

6月4日（水）初の試みとして港北区以外での出前講座を行いました。会場の港南区社会福祉協議会「そよ風の家3F」にて佐藤宗達氏と実施。主催者は「わが住む町を愉しむ会」、後援は「港南区役所」。「わが住む町を愉しむ会」は開始され18年になる会であり、今年度ほぼ毎月、フィールドワークや講座が組まれています。地域の歴史や自然について学ぶことにより、住んでいる地域に親しみをもち、関りを持ちながらこれからの生活を愉しもうと『学びと散策の講座』を企画するとの趣旨のもと、今回保存の会への講演依頼となりました。

2時間という長時間の講義でしたが、参加いただいた42名の方々には熱心にお話を聞いていただきました。ほとんどの方が地下壕見学されてなかったもので、「地下壕見学の疑似体験をしていただこう」と説明にも熱が入り、アンケートもたくさん頂き、多くの方の理解を得られたのかと感じました。

今後も機会あれば、こうした講演会も行っていきたいと思います。



於：港南区社会福祉協議会「そよ風の家3F」

活動の記録 2025年4月～7月

- 4/25(金) 会報161号発送 来往舎中会議室
 4/26(土) 定例見学会 46名
 4/30(水) 慶應高校卒研見学会 13名
 5/8(木) 運営委員会 来往舎小会議室
 5/10(土) ガイド養成講座② フィールドワーク
 地上から日吉台地下壕を巡る 22名
 5/14(木) 定例見学会 31名
 5/24(土) 定例見学会 46名
 5/25(日)・5/30(金)～6/1(日) 平和のための戦争展
 in よこはま かながわ県民センター
 (5/25(日)/31(土) 特別企画 二階ホール・5/29(木) 展示場設営・5/30(金)～6/1(日) 展示)
 5/26(月) 福澤研究センター設置講座⑥「慶應義塾と日吉台地下壕」阿久澤武史氏
 (慶應義塾高校校長、日吉台地下壕保存の会会長) 独立館
 6/2(月) 福澤研究センター設置講座⑦ 日吉台地下壕見学① 50名
 6/4(水) 港南地区センター講演会(わが街を愉しむ会主催) 42名
 6/5(木) 運営委員会 来往舎小会議室
 6/9(月) 福澤研究センター設置講座⑧ 日吉台地下壕見学② 83名
 6/11(水) 定例見学会 43名
 6/14(土) ガイド養成講座③ 来往舎中会議室 30名
 6/16(月) 福澤研究センター設置講座⑨「戦没塾生 上原良司を通してみる戦争の時代」
 亀岡敦子氏(上原良司研究家、日吉台地下壕保存の会副会長) 独立館
 6/21(土) 定例見学会 45名
 6/23(月) 慶應大学経済学部座学 橋口先生
 パワポ授業 独立館 D302 7名
 6/25(水) 東住吉小学校6年生見学会① 24名
 6/28(土) 第37回日吉台地下壕保存の会
 定期総会・講演会 来往舎大会議室
 6/30(月) 東住吉小学校6年生見学会② 53名
 6/30(月) 慶應大学経済学部見学会 7名
 7/1(火) 塾史展示館見学会 28名
 7/3(木) 運営委員会 来往舎小会議室
 7/4(金) 田園調布学園大学見学会 11名
 7/5(土) 慶應大学理工学部見学会 9名
 7/9(水) 定例見学会 47名
 7/10(木)～8/16(土) 港北区図書館パネル展示会
 7/12(土) ガイド養成講座④ 来往舎中会議室
 28名

○お問合せ・申込みは見学会窓口まで



6/25 東住吉小学校6年生見学会



日吉駅のツバメ

日吉台地下壕保存の会会報
 発行：日吉台地下壕保存の会運営委員会
 会長 阿久澤武史
 年会費：二千円
 郵便振込口座番号：00250-2-74921
 加入者名：日吉台地下壕保存の会

連絡先

(見学会) 電話 080-5612-6344 佐藤 メールアドレス hiyoshidaichikagou@gmail.com

(会計) 亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 電話 045-561-2758

(その他) 喜田美登里：〒223-0064 横浜市港北区下田町 2-1-33 電話 045-562-0443

ホームページ・アドレス：<http://hiyoshidai-chikagou.net/>